

註 引用した宮沢賢治の作品はすべて 校本宮沢賢治全集第七卷・第十一卷（筑摩書房）によった。表記もそのままとした。

註1 たとえば、宮沢賢治研究叢書6「注文の多い料理店」研究Ⅰ続橋達雄編所収の、

「鬱金しゃっぱと赤いしゃっぱ」小沢俊郎（「賢治研究」十七号）

「鹿踊りのはじまり」雑感 恩田逸夫（「四次元」八八号）

註2 註1の小沢氏の論文

註3 作品論 宮沢賢治（萬田務 伊藤真一郎編） 双文社出版所収

註4 註1の小沢氏の論文

註5 註1の恩田氏の論文

世界という構図になるが、「すきとほつた秋の風から聞いた」という虚構性を重視すれば初めから終わりまで全部ファンタジーの三重構造になる。

「わたくし」の世界の虚構性は、言うまでもなくこの童話集の序の「これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野はらや鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらつてきたのです。」という賢治の創作態度と深くかかわりあっている。その意味するところは別問題として、構成の上からだけ考えれば三重構造がかっちりとは組まれた作品だといえるであろう。

なお「注文の多い料理店」の作品の中でこれと同じ構成をもつ作品として「狼森と策森、盗森」をあげたのは小沢俊郎氏（註4）である。このような他作品との比較は稿を改めて行う予定でここでは省略する。

次にこの作品の音楽性演劇性について述べることにする。

はんの木の

みどりみじんの葉の向さ

ぢやらんぢやらんの

お日さん懸がる

にはじまる鹿たちの歌について「歌劇形式」と「短歌形式」を、またこの物語全般について「戯曲形式」を指摘されたのは恩田逸夫氏である。（註5）

異論はないのであるが「かしはばやしの夜」に比べれば西洋音楽の形式としてオペラの必要素は希薄になっているように思う。「かしはばやしの夜」の歌が歌合戦・合唱・アリアであり、内容的にはナンセンスな即興歌であったのに対して、これは「短歌形式」の民謡であり、即興ではあるにしてもその場の状況を十分織り込んだ独唱となっている。

「かしはばやしの夜」との対比でいえば、それが舞台装置的な月下であったのに対してこちらは野原に傾く夕陽、太陽の下のものがたりである。柏の木との漫才的アドリブ的なやりとりであったのに対して、六足の鹿が繰り返す動作はむしろ伝統的な民謡の形式であるといえる。

「鹿踊りのはじまり」の東北弁（方言）・短歌・北上山地・民謡がかもしだす民族性は、「かしはばやしの夜」の西洋性に対して、十分意識的に対置されたものであるといえるかもしれない。

それはともかくこの作品が、はなやかではないが深い民族的な音楽性にしっかりと支えられた物語であることはいうまでもない。

以上、イーハトヴ童話「注文の多い料理店」のもっとも古い制作年月日をもつ三作品「かしはばやしの夜」「月夜のでんしんばしら」「鹿踊りのはじまり」に共通する構成の確かさ、音楽性・演劇性について考察したのであるが、結論的にこれら三作品の完成度はきわめてたかいといっているのではないか。

重構造で語られる。複雑になってはいるが構成上はじつにすっきりと組み立てられている。それを以下に示すことにする。

—そのとき西のぎらぎらのちぢれた雲のあひだから、夕陽は赤くなく、めに昔の野原に注ぎ、すすきはみんな白い火のやうにゆれて光りました。わたくしが疲れてそこに睡りますと、ざあざあ吹いてゐた風が、だんだん人のことばにきこえ、やがてそれは、いま北上の山の方や、野原に行はれてゐた鹿踊りの、ほんたうの精神を語りました。

—そこらがまだまるつきり、丈高い草や黒い林のままだつたとき、嘉十はおぢいさんたちと北上川の東から移つてきて、小さな畑を開いて、粟や稗をつくつてゐました。あるとき嘉十は……

—嘉十にはかに耳がきいんと鳴りました。そしてがたがたふるえました。鹿どもの風にゆれる草穂のやうな気もちが、波になつて伝はつて来たのでした。嘉十はほんたうにじぶんの耳をうたがひました。それは鹿のことばがきこえてきたからです。

……

—嘉十はもうまつたくじぶんと鹿とのちがひを忘れて、

「ホウ、やれ、やれい。」と叫びながらすすきのかげから飛び出しました。

鹿はおどろいて一度に竿のやうに立ちあがり、それからはやてに吹かれた木の葉のやうに、からだを斜めにして逃げ出しました。銀のすすきの波をわけ、かゞやく夕陽の流れをみだしてはるかにほるかに遁げて行き、そのとほつたあとのすすきは静かな湖の水脈のやうにいつまでもぎらぎら光つて居りました。

そこで嘉十はちよつとにが笑ひをしながら、泥のついた穴のあいた手拭をひろつてじぶんもまた西の方へ歩きはじめたのです。

—それから、さうさう、昔の野原の夕陽の中で、わたくしはこのはなしをすすきとほつた秋の風から聞いたのです。

つまり最も大きな第一の器（アの部分）は、「わたくし」が「人のことばにきこえ」た「すすきとほつた秋の風」から「鹿踊りの、ほんたうの精神」をきいたということであつて、その大きな器のなかにもう一つ第二の器（イの部分）がある。それは現実的な世界であつて嘉十という男が湯治の途中鹿に出合う話となつてゐる。そしてその中にある第三の器（ウの部分）が物語の核心で、喋つてゐる鹿たちの話となつてゐるのである。

「わたくし」|| 作者の視点でとらえると、わたくしの現実世界 ↓ 嘉十の現実世界 ↓ 驚異の世界 ↓ 嘉十の現実世界 ↓ わたくしの現実

できたとき、とつぜんシグナルがさがる。ところがその次に大変なことが起きる。がんがん鳴っていた電信柱が一斉に北の方へ歩きだしたのだ。電信柱は昔ふうの軍歌を歌って次々に行進していく。そのうち向こうから汽車が来るのをみとめた電気総長があわてて号令をかけると、行進は止まって軍歌もただのシグナルの音にかわってしまう。そしてシグナルがあがってもとの鉄道線路の場面にもどるといふものである。

このファンタジーの部分をも鳥居邦朗氏は『月夜のでんしんばしら』—心象断片—の中でつぎのように解説する。(註3)

……じっさい賢治がこれを描写していくときに頭にあったのは、止っている「でんしんばしら」のわきを汽車が通りすぎていく感覚、それを汽車の方を固定させれば「でんしんばしら」がつぎつぎと行進していくように見える、その転換であったに違いない。

(略)

恭一が電信柱の行進する不思議に出会うというこのファンタジーは確かにそういうところから着想されたものだろう。この作品は次のように構成されている。

ア
—ある晩、恭一はざうりをはいて、すたすた鉄道線路の横の平らなところをあるいて居りました。……つまりシグナルがさがつたといふだけのことです。一晚に十四回もあることなのです。

—ところがそのつぎが大へんです。

イ

……

—「あかるくなつた、わあい。」と叫んで行きました。
でんしんばしらはしづかにうなり、シグナルはがたりとあがつて、月はまたうろこ雲のなかにはいりました。そして汽車は、もう停車場へ着いたやうでした。

つまりこの作品の構成も現実世界↓驚異の世界↓現実世界という切り替えがはっきりしている。ファンタジーの入り口出口がはっきりしているといえよう。

この作品の音楽性についてはとりたてて言うこともないが、全編にみなぎっているのは「ドツテドツテ、ドツテド」というドラムに比すべき軍歌、行進曲の勇ましい調べである。

4 「鹿踊りのはじまり」について

嘉十というおじいさんが湯治にでかける途中、休んだところへ手拭を忘れたことに気付きもどってみると、六足の鹿がその手拭をなんだろうと詮索している。その鹿の言葉がわかるようになった嘉十を通してユーモラスに鹿踊りのはじまりを語ってゆく。

「かしはばやしの夜」と「月夜のでんしんばしら」が主人公の現実世界から驚異の世界体験という二重構造で語られたとするなら、この「鹿踊りのはじまり」はそれに「わたくし」の世界を加えた三

扱いをみればよくわかる。清作が柏の木たちといさかい喧嘩している時、林の木の間から「まん円い大将」すなわち月が昇ってくる。その月の出から順に月の描写をひろっていく。

- 1 東のとつぷりとした青い山脈の上に、大きなやさしい桃いろの月がのぼったのでした。
- 2 お月さまは、いまちやうど、水いろの着ものと取りかへたところでしたから、そこらは浅い水の底のやう、木のかげはうすく網になつて地に落ちました。
- 3 月のあかりがぼつと青くなりました。
- 4 月のあかりもなんだか白つぼくなりました。
- 5 柏はざわめき、月光も青くすきほり、
- 6 月光はすこし緑いろになりました。
- 7 お月さまの光が青くすきとほつてそこらは湖の底のやうになりました。
- 8 お月さまのあかりに青じろくはねをひるがへしながら
- 9 月の光は真珠のやうに、すこしおぼろになり、
- 10 なるほど月はもう青白い霧にかくされてしまつてぼおつと円く見えるだけ、

賢治のみごとな自然描写と言えはそれまでだが、ここでの月の描写には照明で自在に変化させうる舞台装置としての趣がありはしないだろうか。柏ばやしという舞台の中央にかかる大きな月。歌い手

が変わるたびに色を変えて舞台効果をもりあげる。そういう月のように見えるのだが。

もう一つこの舞台での特色は、清作と大王との間のつぎのやりとりである。

「おれはちやんと、山主の藤助に酒を二升買つてあるんだ。」

「そんならおれにはなぜ酒を買はんか。」

「買ふいはれがない」

「いや、ある、沢山ある。買へ」

「買ふいはれがない」

両者の口争いの結末が三度もこのやりとり（全く同じではないがほとんど類似している）に結びついていく。こういう掛け合い漫才的なおかしみが舞台演劇的な効果をたかめている。

以上みてきたようにこの作品にきわめて濃厚な音楽性と演劇性が認められるとすれば、これは「夏のをどり」とか歌物語とかいうよりも、西洋音楽にいうオペラあるいはオペレッタを模して作られたと言つていいのではないか。

3 「月夜のでんしんばしら」について

この作品の梗概は次のようなものである。恭一という少年が鉄道線路の横を歩いていく。向こうに停車場のあかりが見えるところま

K (さつきの木のとなり…の柏の木)

清作は、葡萄をみんなしぼりあげ
砂糖を入れて

瓶にたくさんつめこんだ。

L (さつきのとなり…一本の柏の木)

清作が 納屋にしまつた葡萄酒は

順序たゞしく

みんなはじけてなくなつた。

この歌謡の比較は小沢俊郎氏の論文(註2)に詳しいからそちらにゆずる。こうして並べてみても多彩に結実したあとが十分わかる。また歌い手もはっきりさせて、初期形が「やつで踊」「しゅろをどり」などすべて踊りを伴っているのに対して童話集では純粹な歌合戦になっている。歌合戦でありながら「夏のをどりの第三夜」と画かきがいうのは、初期形から趣向としては変化させながらこの言葉だけはそのまゝ痕跡として残ったからだと思われる。童話集では柏の枝振りを手足の動作と見立てる以外は舞踊の要素は消えている。

7
それに代わって歌い振りの描写に特色を加えた。初期形歌謡1「くるみは」を歌うところは「若い木はひとりであつたつてひとりでもどりはじめました。」とあり、これに対応する童話集歌謡A「おつきさん」は「柏の若い木はみな、まるで飛びあがるやうに両手をそつちへ出して叫びました。」とあるやうに歌うのではなく叫ぶのである

るが、それに続く歌謡Bは初期形には対応するものがない木大王の歌だが、それを「柏の木大王」は「白いひげをひねつて、しばらくうむうむと云ひながら、ぢつとお月さまを眺めてから、しづかに歌ひだすのである。この場面はオペラでコーラスをバックに堂々とアリアを歌い出す場面をほうふつさせる。

また童話集歌謡G・Hのところでも歌つた柏の木に「いいテノールだねえ。うまいねえ」という賛辞がくりかえされる。テノールという言葉は初期形にはみあたらない。

後半「たくさんのふくらふども」の集団が登場する場面「お月さまのあかりに青じろくはねをひるがへしながら、するするするする出てきて、柏の木の頭の上や手の上、肩やむねにいちめんにとまりました。」そして、梟の大将は「まるで黒砂糖のやうな甘つたるい声でうた」い、「ふくらうどもはもうみんなばかのやうになつてどな」ところも、舞台に登場した男声合唱と掛け合うバスカバリトン歌手といった趣を感じさせる。

順序がやや前後するが、この作品は「鬱金しやつぼのカンカラカンのカアン」という「まるで調子はづれの途方もない変な声で」「どなるのがきこえ」ところで開幕する。この澄んだ響きのある高音のフレーズも大変音楽的である。同じやうにフィナーレでは「赤いしやつぼのカンカラカンのカアン」と「力いっばい叫んでる声」が幕間に細く消えていく。

つまりこの「かしはばやし夜」はきわめて音楽的だといえる。この作品が音楽性のほかに演劇性をもっていることは、「月」の

B (柏の木大王の歌)

こよひあなたは ときいろの
 むかしのきもの つけなさる
 かしはばやしの このよひは
 なつのをどりの だいさんや
 やがてあなたは みづいろの
 けふのきものを つけなさる
 かしはばやしの よろこびは
 あなたのそらに かかるまゝ。

C (画かきの歌)

一とうしやうは 白金メタル
 二とうしやうは きんいろメタル
 三とうしやうは するぎんメタル
 四とうしやうは ニツケルメタル
 五とうしやうは とたんのメタル
 六とうしやうは にせがねメタル
 七とうしやうは なまりのメタル
 八とうしやうは ぶりきのメタル
 九とうしやうは マツチのメタル
 十とうしやうから百とうしやうまで
 あるやらないやらわからぬメタル。

D (小さい柏の木)

うさぎのみゝはながいけど

うまのみゝよりながくない

E (また一本の若い柏の木)

きつね、こんこん、きつねのこ、
 月よにしつぽが燃えだした。

F やまねこ、にやあご、ごろごろ

さとねこ、たっこ、ごろごろ。

G (すこし大きな柏の木)

くるみはみどりのきんいろ、な、
 風にふかれて すいすいすい、
 くるみはみどりの天狗のあふぎ、
 風にふかれて ばらんばらんばらん、
 くるみはみどりのきんいろ、な、
 風にふかれて さんさんさん。

H こざる、こざる、

おまへのこしかけぬれてるぞ、
 霧、ぼつしやん ぼつしやん ぼつしやん、
 おまへのこしかけくされるぞ。

I (入口から三ばん目の木)

うこんしやつぽのカンカラカンのカアン
 あかいしやつぽのカンカラカンのカアン

J (若い頑丈さうな柏の木)

清作は、一等卒の服を着て
 野原に行つて、ぶだうをたくさんとつてきた。

つまり現実世界↓超自然の世界↓現実世界というファンタジーの

パターンを考えるなら、「どんぐりと山猫」はその境界に画然としたものがなく曖昧にされているのに対して、「かしはばやしの夜」はその境界が極めて意識的にとり扱われているといえよう。

どちらの方法がいいとは速断できない。「どんぐりと山猫」のどこからともない不思議な世界の描き方も魅力的だからである。ここでは二つの作品に方法的な違いがあることの指摘にとどめておく。

賢治の作品が音楽性に満ちていることは多くの人が指摘している。この「かしはばやしの夜」は「鹿踊のはじまり」とともにそれがきわだっている。(註1)

この「かしはばやしの夜」に初期形と称している作品のあることは既に述べたが、その初期形と童話集の形を比較してもっとも異なる点は、柏の木によって歌われる歌謡とメダルの種類だが、ここでは歌謡を歌われる順に両者並べてみる。

初期形の歌謡

1 (若い木の歌)

くるみは みどりのきんいろ。な。

風にふかれて、スイスイスイ。

くるみは みどりの天狗のあふぎ。

風にふかれて バランバランバラン。

くるみはみどりの きん色。な。

日に照らされて サンサンサン。

2 (又一人の若い柏の木の歌)

やつではみどりの、きんいろ。な。

風にふかれて スイススイスイ。

やつではみどりの 天狗のあふぎ。

風にふかれて バランバランバラン。

やつではみどりの きんいろ。な。

日にてらされて サンサンサン。

3 しゅろは きんいろ、バランバランバラン。

4 (入口から三番目の木の歌)

う金しやつぽの、カンカラカンノカン。

5 ステッキピョンピョン。

6 靴ヒョイヒョイ。

7 蟹、チョン チョン。

8 狐こんこん

9 狸ほんぽん

童話集の歌謡

A (柏の若い木)

おつきさん、おつきさん、おつつきさん、

つにお見外れして すみません

あんまりおなりが ちがふので

つにお見外れして すみません。

りはっきりと意識されていると言えるのではないか。

この、ファンタジーの入り口出口ということを、童話集巻頭の「どんぐりと山猫」と比較してみるとことはさらにはっきりする。

「どんぐりと山猫」も一郎という少年が山猫をたすけてどんぐりの裁判をするという超自然の世界を描いているが、この物語でファンタジーの入り口としてもっともふさわしい箇所をあげるとすればおそらく次のくだりであろう。

山猫から「めんどなさいばんしますから、おいでなさい」と呼ばれた一郎は道をたずねたずね行く。

一郎がすこし行きましたら、谷川にそつたみちは、もう細くなつて消えてしまひました。そして谷川の南の、まつ黒な榎の木の方へ、あたらしいちいさなみちがついてゐました。一郎はそのみちをのぼつて行きました。榎の枝はまつくろに重なりあつて、青ぞらは一きれも見えず、みちは大へん急な坂になりました。一郎が顔をまつかにして、汗をぼとぼとおとしながら、その坂をのぼりますと、にはかにぼつと明るくなつて、眼がちくつとしました。そこはうつくしい黄金いろの草地で、草は風にざわざわ鳴り、まはりは立派なオリーブいろのかやの木のもりでかこまれてありました。

果たしてその草地のまん中には「おかしな形の男」がいる。どうと吹く風によって黄いろな陣羽織のようなものを着た山猫があらわれどんぐりの裁判が始まる。その超自然の世界がくりひろげられる

舞台とそこにいたる道程の描写はじつに見事だ。しかし超自然の世界は、清作が柏林の中にはいった時のように、一郎が「オリーブいろのかやの木のもりでかこまれた」「うつくしい黄金いろの草地」にたどりついた時に初めて起こったわけではなかった。冒頭の「山ねこ拝」のハガキから始まって道中道を尋ねた栗の木・笛ふきの滝・きのこなどすでに超自然の世界は始まっているのである。

同じことはファンタジーの出口にもいえる。

馬車は草地をはなれました。木の藪がけむりのやうにぐらぐらゆれました。一郎は黄金のどんぐりを見、やまねこはとぼけたかほつきで、遠くをみてゐました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりはだんだん光がうすくなつて、まもなく馬車がとまつたときは、あたりまへの茶いろのどんぐりに変つてゐました。そして、山ねこの黄いろな陣羽織も、別当も、きのこの馬車も、一度に見えなくなつて、一郎はじぶんのうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて立つてゐました。

驚異の世界の舞台である「草地」を離れても山猫はまだそのままいる。そして馬車が進み、とまると「一度に」不思議は「見えなくなつて」しまう。

このあとに現実の世界での一郎の描写が短いながらある。それは「おかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちにきました。」という冒頭の一行に対応するほどの短さである。

美しい晩かしわ林にはいり、柏たちの「夏のをどりの第三夜」を見聞くことになる。後半清作は柏たちのひやかしにあらうが折からの霧によって「夏のをどり」の幕が下るされるといったナンセンス・テイルといってもいいファンタジーである。

まず作品構成の上からみていくと、その柏たちの「夏のをどり」のファンタジックな部分を真ん中にはさんで前後に現実世界での清作の描写がある。それを分かりやすいように示すと次のようになる。

—清作は、さあ日暮れだぞ、日暮れだぞと云ひながら、稗の根もとにせつせと土をかけてみました。……画かきはにはかにまじめになつて、赤だの白だのぐちやぐちやついた汚ない絵の具箱をかついで、さつさと林の中にはいりました。そこで清作も、鋏をもたないで手がひまなので、ぶらぶら振つてついでに行きました。

—林のなかは浅黄いろで、肉桂のやうなほひがいつぱいでした。

—清作はそこで林を出ました。柏の木はみんな踊のままの形で残念さうに横目で清作を見送りました。

—林を出てから空を見ますと、さつきまでお月さまのあつたあたりはやつとぼんやりあかるくて、そこを黒い犬のやうな形の雲がかけて行き、林のずうつと向ふの沼森のあたりから、

「赤いしやつぼのカンカラカンのカアン。」と画かきがいっぱい叫んでゐる声がかすかにきこえました。

この作品においては超自然の世界⇄ファンタジーの世界への出入口がきわめてはっきりしている。すなわち柏林の中（イの部分）だけが超自然の世界であつて、そこは浅黄色で肉桂の匂いがいっぱいという特異な雰囲気をもっている。そこでは柏の木たちは歌を歌ったり喋ったりする。そして林から出ると同時に現実世界にもどる仕組みになっている。

ところでこの作品には不完全な形だがもう一つの形が残されていて初期形とよばれている。校本宮沢賢治全集第七巻によって比較してみると、ファンタジーの入り口にあたる部分は「林の中は浅黄いろでしんとしてゐました。」となつていてそれに続く部分は変わっていない。「しんと」から「肉桂のやうなほひ」への変化は超自然感を増すためのものだが、さらにもう一点初期形ではこの部分改行されずに「そこで清作もついでに行きました。」に続けられている。

次にファンタジーの出口は初期形では「柏はみな踊のまゝの形で、残念さうに横目で清作を見送りました。」で終わつていて、「林を出てから……」以下がなく超自然の世界から現実の世界への回帰がなされていない。つまり冒頭の現実世界の部分との呼応（アの部分）がないといつていいと思う。

ということは童話集に収められた作品の方が、清作が現実世界からファンタジーの世界に入ってまた出てくるという構図が初期形よ

作年月日に目を通せば「どんぐりと山猫」を巻頭に制作順に並べられていると見ることができ、
「かしはばやしの夜」以下三作のところでこの三作が実は巻頭作より古い制作であることが分かる。

ここはやや不自然の感があったからだろうか、十字屋書店版「全集別巻」（昭和十九年刊）筑摩版「全集十一巻」（昭和三十二年刊）などの年譜ではこの制作を一九二二（大正十一）年の項に、つまり一年くり下げて載せている。また小倉豊文氏も角川文庫版「注文的多い料理店」の解説「新しい古典復刻の弁」（一九五四・八・六）の中で、

『注文的多い料理店』所収の童話九篇は、大正十年九月十九日完成の「どんぐりと山猫」にはじまり、翌十一年九月十五日完成の「鹿踊りのはじまり」に終わっている。

と述べて、三作の制作年一九二二（大正十年）は一九二二（大正十一年）のこれもミスプリントととっている。

一方昭和三十五年「四次元」一一二号に発表された『童話集』作品の制作年次」の中で恩田逸夫氏は、制作年次について次のように述べるとともに綿密に考察している。この論考を、宮沢賢治研究叢書5「注文的多い料理店」研究Ⅰ統橋達雄編によって後づけてみる。

原著に、はつきりと制作日付が示され、しかもそれが筑摩版全集に再録されているながら年譜で違えることにつき、かねてから気になっていた。原著の日付を訂正する理由が示されていないし、それに原著通りで何ら差支えないばかりでなく、この方が年譜のように十一年作とするよりも、賢治の制作史をより素直に説

明できるからである。

そしてその結果を年譜制作の宮沢清六氏に照会したところ、清六氏から、

この作品全部が制作年月順にならべられているものという先入感から、春と修羅一集がそうであり「注文的多い料理店」もその順序がその様に見ればそれで順序に変なところもない為、最後の三つの作品制作年は誤植であろうと思っていたのです。

そして清六氏が盛岡に行つて「注文的多い料理店」の出版者及川四郎氏に会つてたしかめて、

何でも、作品の順序は、一応作品順にならべたものを賢治自身取り変へたような記オクがある」と申されていきました。即ち、最後の三篇を前の方から持つていつてならべ、年月はその通りに書いたものであらうと思ひます。私の年譜は明らかに誤りであらうと私は決断したのです。

「これで、以後、問題の三篇に関する限り、年譜は改められることになる」として、恩田氏は論文をしめくくった。

そういういわくつきともいえる「かしはばやしの夜」「月夜のでんしんばしら」「鹿踊りのはじまり」の三作についてとりあげることにする。

2 「かしはばやしの夜」について

この物語の内容は、百姓の清作がせ高の画かきにさそわれて月の

イーハトヴ童話「注文の多い料理店」のうち

「かしはばやしの夜」以下の三作品について

井 上 寿 彦

1 成立事情

宮沢賢治は生前童話集もただ一冊しか公にしていなかった。それがイーハトヴ童話「注文の多い料理店」で、発行は大正十三(一九二四)年十二月一日であった。四六判一九四ページ九編の童話で構成され、定価一円六〇銭初版千部であった。この頃の作品について賢治が相当自信をもっていたことは、東京の文信社で知り合った鈴木東民氏の「筆耕のころの賢治」や関徳弥氏への書簡また弟宮沢清六氏「兄のトランク」などによって知られるが、結果的には売れもせず問題にもされない状況におかれてしまう。

賢治童話が評価を得てからも、この童話集は解体されたりばらばらに他と組み合わせられたりして収録されることが多かった。だがこの童話集の初版には九編それぞれに創作年月日が記入されており、現在ではその九編をまとめて読んだり考察したりすることが当たり

前になっている。

次にその創作年月日を初版の目次通りに「校本宮沢賢治全集第十巻」(筑摩書房)によってあげてみる。

どんぐりと山猫	一九二一・九・一九
狼森と笹森、盗森	一九二一・一一・
注文の多い料理店	一九二一・一一・一〇
鳥の北斗七星	一九二一・一二・二一
水仙月の四日	一九二二・一・一九
山男の四月	一九二二・四・七
かしはばやしの夜	一九二一・八・二五
月夜のでんでんばしら	一九二一・九・一四
鹿踊のはじまり	一九二一・一九・一五

「鹿踊のはじまり」の一九は九のミスプリントであろう。さて創